

小舟に乗った図書館員

吉田右子

図書館情報メディア研究科助教授

「来週も必ず聴いてくださいね。」

私はアメリカの公共図書館の歴史を研究している。アメリカは今でこそ各コミュニティに当然のように図書館があり活発に利用されているのだが、近代的な図書館がたくさん作られるようになったのは、20世紀前半である。鉄鋼王アンドリュー・カーネギーが図書館の建築に大規模な資金援助をしたこともあり、1917年までに1,700もの図書館が設置された。

私の大学院時代の研究テーマは、現在の所属分野である図書館情報学のルーツを探ることで、地下深い書庫に潜って古い時代の資料を調べる毎日を過ごしていた。文献探索の本来の目的は図書館学が成立した当時の論文、とりわけ1928年に図書館学の博士課程をはじめて設立したシカゴ大学図書館学大学院についての資料を集めることだった。

しかし私の目をひきつけたのは、図書館

学校の記事よりも、さまざまな図書館業界誌に掲載されていた当時の図書館の様子を伝える写真であった。1920年代といえばラジオが各家庭に普及した時代であり、ラジオブームのなかでコミュニティのさまざまな機関が放送事業にかかわったのだが、図書館も例外ではなかった。私が見ていた雑誌にもそうした図書館内のラジオ放送の写真がたくさん掲載されていた。

図書館員がマイクを握り放送に携わる姿は、図書館に対するイメージを変えるに十分なインパクトがあった。最初に写真を見た時に受けた印象は、なぜ図書館がラジオ放送まで手がけるのだろうかという単純な驚きにすぎなかった。しかしこの時の驚きは次第に、図書館はいったい何なのかという大きな問いに変わっていった。

当時の図書館サービスのことをいろいろ調べるうちに、アメリカの図書館はすでに20世紀前半には「図書」館という枠組みを

超えてメディアセンターとして機能していたことがわかってきた。今から80年前にラジオ局のDJブースから颯爽と放送活動を行ったことから明らかであるように、図書館員は新しいテクノロジーに対して敏感であり、新しいメディアを貪欲に図書館サービスに取り入れてきた。テレビが発明された時にはいち早く図書館にテレビカメラを入れて、児童室からストーリーテリングを中継したし、レコードの貸出、語学教室、コンサート、映画会なども頻繁に行ってきた。そうした伝統は現在の図書館にも受け継がれ、多彩なサービスを市民に提供している。

コミュニティの図書館の存在意義

新しいメディア・サービスをアピールしつつ伝統的な文献資料の提供を地道に続けることで、アメリカのコミュニティには徐々に図書館が根づいていった。もちろんすべてのアメリカ人が図書館を利用したのではない。しかし使わない市民も含めて図書館がコミュニティに欠かせないものだという意識が確実に育まれていったのである。

1950年代に行われた興味深い調査がある。娯楽雑誌・新聞の定着やラジオ・テレビの普及を背景に、コミュニティの図書館は住民に支持されているのか、図書館はどのように利用されているのかを調べるため

の大掛かりな調査が実施された。そこでは「住民のすべてが公共図書館を積極的に利用するわけではない。公共図書館の利用者はごく限られた範囲にとどまる。しかし利用しない人びとも含め、住民は図書館が自己学習の拠り所としてコミュニティになくてはならないものであると認識し、図書館の存在を支持している」という結果が導き出された。

この調査から50年以上経った現在でも、図書館利用者が限定されているという事実には変わりはない。それでも「何かあったら図書館に行く」という行動パターンは、アメリカ人の日常に組み込まれている。天気予報を聞くためにラジオをつけるように、書店で好みの雑誌をかうように、図書館を使い慣れた人は何か疑問があればわりと気軽に図書館に行って調べ物をするのである。図書館は数あるメディアの一つとして利用されているとあってよいだろう。

ライブラリアンシップという専門スキル

こうした利用者の期待にこたえるために図書館は図書提供にとどまらず、住民の学習にかかわることであればどんなことにも積極的に取り組んできた。しかしそこには大きな原則がある。それは専門職である図書館員がメディアを介して利用者とコミュニケーションをはかり、利用者の情報

要求を満たすための支援を行なう点である。コミュニケーションの形式は時代とともに変化し続けているが、この原則は100年前も今も変わらない。つまり図書館の存在意義の1つは、メディアの媒介者となる図書館員の持つ専門的なスキルにあるといえる。メディアの種類を問わず情報の収集、組織化、提供にかかわる専門的なスキルは「ライブラリアンシップ」と呼ばれ、アメリカでは大学院修士課程を修了することによってこのスキルを修得する（残念ながらライブラリアンシップという言葉日本語にうまく置き換えることができない）。ライブラリアンシップは技術的な側面だけでなく、技術を支える理論と思想をも含む広い概念である。

現在の私の関心は、近代公共図書館が成立した時代のライブラリアンシップや図書館専門職の構造を探ることにある。図書館員に関していえば、19世紀後半のある時期、急速に専門職化が進んだ。今あるライブラリアンシップの基礎は、十進分類法の考案者として知られるメルヴィル・デュエイによって築かれた。デュエイはそれまで徒弟制度の中で知識が伝達されてきた図書館業務を「最善の図書を最低のコストで最大多数の人に」というシンプルな目標のもとに体系化することで、専門領域のレベルにまで押し上げた人物である。

デュエイは、図書館員養成教育にも力を注ぎ多くの女性を図書館界に送り込んだ結果、図書館界には専門スキルを身につけた女性図書館員が増加した。一方、図書館の管理職として図書館のサービスや運営のあり方を決定したのは、相対的に少ない数の男性図書館員であった。図書館界を実質的に方向づけた男性指導者は、女性図書館員に対し実務的な能力を発揮しつつ、同時にヴィクトリア朝時代の家庭の雰囲気や図書館にもたらすことを求めた。この期待に忠実に答えた大勢の女性図書館員によって、公共図書館サービスの基礎が築かれたのである。

小舟に乗った図書館員

しかし一方で、男性指導者が求めた役割にとらわれず、同時代の理想的家庭のイメージを纏う図書館から飛び出して、図書館サービスの新たな局面を切り開くようなラディカルな活動を展開した女性図書館員もいた。

そうした図書館員が行なった代表的な仕事に、アウトリーチサービスがある。アウトリーチサービスとは、さまざまな理由により図書館に到達することができない利用者、図書館が近づいていってサービスを提供する方法である。アウトリーチは現在では障害者や高齢者などへのサービスとし

で定着しているが、その起源は1920年代に女性図書館員が行なった図書提供サービスにさかのぼることができる。馬にまたがりあるときは小舟に乗り込んで山間部に図書を届けに向かった図書館員の写真がたくさん残されている。

こうした実践は、図書館という場所がライブラリアンシップの絶対的な要件でないことを示している。専門職がメディアを介して住民の学習活動を支援するという原則が貫かれていれば、それはどんな場所で行なわれてもどのような形を取ろうともライブラリアンシップである。公共図書館研究の目的の1つは、そうした活動を含めたすべての図書館サービスを支える理念や思想を確立することなのである。

とはいえアウトリーチサービスはあくまでも例外的なサービスであり、図書館研究における分析対象の中心は、館内で行なわれる正統的な図書館サービスに置かれてきた。しかし私は1920年代の図書館活動を研究しているうちに、非主流とされるサービスの中に図書館サービスの本質が隠れているのではないかと思うようになった。この思いは図書館サービスの表層部分の分析にとどまり、現実の図書館の現場とうまく切り結べない図書館研究に対する問題意識とも重なった。現在の図書館研究の閉塞状況を打破するためには、主流のサービスの陰

に埋もれている「もう一つの」ライブラリアンシップを明らかにしていかなければならないと強く感じたのである。

実際に、初期公共図書館史における周縁的な活動に焦点をあわせた研究が、アメリカでは徐々に増えつつある。こうした研究の中で、女性図書館員によるアウトリーチサービスは、伝統的な図書館の枠組みを変えるライブラリアンシップのあり方を考える上で貴重な事例となる。またヴィクトリア朝の行動の範疇で活動した模範的な女性図書館員もまたその実践内容に踏み込んで研究すべき対象である。たとえば中産階級の文化の伝道者という役割を女性図書館員はどのようにとらえていたのだろうか。あるいは図書館における女性図書館員の位置づけは、そうした役割とどのように関係していたのだろうか。女性と読書をめぐる神話を批判的に再構築する必要もあるだろう。いずれの場合であっても女性図書館員にとって、図書館は専門職の実践を通じて自らの職業理念を示し同時に自己を表現する場として意味づけられていたのである。

おわりに：小舟で運ばれたもの

「早く効率よく学ぶ方法」は巷にあふれているが、「時間をかけてゆっくり学ぶ」ことを求める人にとって、図書館がおそらくその要求を満たす唯一の場所である。とす

れば図書館研究にとっての最大の課題は、こうした学び方を肯定し図書館という場に結びつける確固たる実践理念を示すことにあるだろう。換言すれば、利用者と図書館の関係を情報ニーズの達成によってとらえていくこれまでの図書館史研究の方法論を超えて、個人にとっての達成の意味をも問うような研究手法が求められている。

アメリカにも日本にも、そのための手がかりとなるような図書館活動にかかわる専門職と利用者の多様な実践例が蓄積されてきたが、大量の実践記録がほとんど分析されないまま残されている。こうした記録を丁寧に分析し記述していくことで、女性図書館員が馬やボートに乗って利用者届けようとしたものが一体何であったのかを、少しずつ明らかにしていきたいと思う。

(よしだ ゆうこ／図書館情報学)